雲庵雜志

三

雪草雑志巻之三

柳里恭　稿

3863

○

あるひと茶を論ひありとものふことを利休は同じ時代にあるべきものなりといふこのかりそめを茶の招きにてこの時刻と遠くたゝくとをとゝろ刻限残たゞへずして行きたるは内あり潜り戸はおよそ六尺を穿て上は簀のこを敷くあるいは土を重ねうるれはんゝおくそのうへはのりてつくんゝするは形ゝ地乃土くゝえて穴は高たり穴乃底は土のねをたゝゞ中へとゝこゝれバこゝろあへば湯あとして再びつりゝとゝの無らゝこゝろ此ゝうねて朔唱といふ若山杉へおハさバくとちやくく藤はあれゞ五のこゝろ洗ひをゝまゝゝねて知りゝとて穴は高ざゝんを起ゝとむゝくするものゝい

なさに穴とあけつゝ落入りぬ故こそ其日の興ともなりける茶ハひ
たすら手へ修ふこゝろもいらねど賓主ともに応ぜざれバ茶の功了
あらじといひまし
杉野意仙といふ医師豊後の国より京に出て一休禅師に参りたる
なひしばらく大徳寺に居しころ料理の才薬の事などこゝろ得あ
りければ時々禅師にすゝめける其の性質故あるにて万
の事にくはしかりしが禅師常に仏より物とおもひける時ハ膳部の
ものを一ツ器に打まぜて合しすかせとて何とも料理の調ふる
もれをさやうに無下にハしたまふぞと云ば禅師こたへて邪正ハ一
如なり飲食に色善と悪と形しとのたまひしに意仙ハげん
しく思ひけむやう禅師にまさる事あるべしとれハ其儀ぬ別にわりや

なり調味のよろしきぞとや望まずその後ハさもなく有ハざり
しとぞ
東野州佐川田喜六がもとへ今日の御書翰に雪の事なきをたづね
る返状にかきける返事に
眺常なくなれども賞翫を暑後にハ月花とのこそ格別にめでられけれど
雪ハさればなかなか不中の人も多しきこそ是を定めり雪ふる
き日なくハ吹雪にしまかれなどしてこそ死ぬるものも多し
こあればよろこびおどるものどもにハあられずけ東路の旅に由井とい
つるすくに宿をかし夜をこめて雪乃降るまゝバよめる
なかめにハたぐひもなき高根のかゞ山誰おぼし嶺乃雪なるらん
東路乃浜松といふに宿りし時家のあるじ此やまこころよ

里天龍川ハ流るゝ十五里程ど山より入まゝ幸にと信濃乃国のさ
ういあるゝ川そひの地より京地と唱ぶとゝろあり又此地より人
の行ふ度きとゝろゝもあるゝ国の境より養の夢ゆて長さ
五六十里もあるんとおもふそどの機をかけうゝ所の者ハ京丸の
様ゝ之り中せまくゝく行くゝあきん人ゝこゝ亀きゆるゝ所
まゝぞうの地へ行くゝものゝてハいと梯形り雅ゞ祝の世よハ京丸へ
行くゝとのあり子ゝ只管あのゝゝる丸ゝとゝろのゝとゝろ伝ぎく
又ゝるゝ人もゝきよこの翁ゝ丸下男好事のゝ丸まく京丸又て来ゝ
んこゝ者ハゝの眼をゝひゝくゝゝ不行ゝゝ多ゝゝ地ハ家ゝ只ゝ不
里各形ありて農ゝ業をすれゝゝ常の食ハ米ハ稗も食ハで
稗ゆあゝきをすゝへく粕ゝ此ゝこの男ゝ行ゝゝ家ゝゝの中ゝ

ゝとゝゝゝゝ者ゝく麻の織ゝゝ尾花と入れゝゝ彩ゝき枝乃掛
と出ゝて著ゝゝのゝく茂ゝゝゝ丸ゝ家のあゝゝゝ色かゝ
掛ハ木の角ゝゝゝて即ゝゝゝゝ乃人のかゝゝけゝハ乃山と
登ゝて四ゝゝゝゝゝより又ゝ丸ゝゝ家内ゝ
ハ丸ゝ男行ゝく又ゝゝゝ形ゝ岨ゝゝと家ゝゝゝ者の屋
世ゝて激ゝゝ者のいさぎよゝ紀ゝゝいゝゝくゝゝ浅ゝと
ゝてゝゝの大さゝゝくゝゝゝの掛ゝ色紅ゝて
美をおびゝゝ者ゝゝゝゝゝゝ反ゝゝゝ丸ハ乃悪
ゝゝ家内の人ハ丸ゝ者ゝいゝぎゝゝゝゝゝゝの大さ
ゝゝゝ足ゝゝゝゝゝゝ丸川の来屋ゝいふゝゝゝゝ
者のゝゝて流ゝ行ゝゝゝ拾ひゝゝのゝゝゝ一尺余

あるべしと沒年りいろあるを来れ法ようとなく知る人多く来江
のほ人ハこれと京九の牧舟こうく今拾あくくふこれ氏さ人を
やきろふてあくくこの地くもいくまでこの名れある後へ易ねやき
て見くる人多くこそ舟筏も通ハぶる地ふくく人の用形きこれい
ろれりこいり四五軒の家ある中よ書ても見るりの家やち院
矣きて仏壇と無くろ丸壇悔ハ一向宗の志向光明の弥陀ようと
しき大いるこの家ア食和のことと供へ打ともくく燈明こと
名を今向ることふく打ち燈火かく炬とりて業く形せり土人ハ
こ多熱殺ふくて男女こるよ打ふかじ髪ハ稚よくきるといろ子供
も皆熱殺ふくく衣類ハ麻のあくきを織て屋敷蔵の横ぶど了
こると差くり夜も寝くとふ物男淡打へくるものぞこて洗く

る家あるべふ対ゆて詞くる生ども化出をくるものふく用と等
どもこの地ア用形きゆ丸とくく元らば家よくりゆひく浮物ふ
らぶ米とかくふくも狩りみくもるるくいく名ハよ義の戦まぐ
人ア送くセてさすくく形くと義くいるよ大るよ形くべく
いふこまやと前のあるべめぐうき物ア海山迷谷ようくく
ハくく地もあるやと世べを形くも足くきくちあんやらくく
掛子の夢ふ云拾びんとをつす拾びくくべ乗まんことをほつ
す乗くこて見らば伊くんとをつ氏伊てさくず答くんことを
ろつ浜むさべりくく見くず終ア盗まんことをつ氏
所帯の蔵ア云天下ハ一人のてくく下ようあくべ万民打会社天下ア
身帯を一人の身帯ようあくべや内打会社身帯ア了後を物

味噌制し　正成を二葉を戒む

男女歩まず　まくべ菜を足さず　筆さしたる絵よりとろの世の中や思とすまぬのどあるべかりしろ孔雀やなのちらぬのどみまし　却をしろ孔酒りまやかろこぶれぬのど群

紅葉の羽よりと　繋ぎ　ぎうぶくちぎりてまぎげよとこぶ葉を見よ

落きまおろく濃きまとまちをのまくん

修り孔羽ホ茶ハ毋のるでまますせく紅まぶ色とを人柳ハ風

ホをまるよ消ひく緑いあくかり

毛用の重器ハぎまあくひとも夢くくゆとまでも松めわきく

日の用ホをまず　毛蓋の妻を多く財ともとたべしてまます

五どもをどのふ毛くあるらば美味ハまるまよくかきもの

ホあくノ乗くくをを費ふくくを用のを孔よりとををべく

夏日の七快

ぼんぼくくして機を掃る　掃除をくおち水くをる　枕孔紙を彩工

くたる　雨を五をく月のいくくをる　ふをでくくく焼乃ろうる　涼き乳

ぐれよ魚孔ろうをたる　月のをくくを

飲酒乃十徳

穂を西く　労ををひ　憂をを手を）　酔をひき　気をめ

ぐくく　病城をけ　毒を解く　人と祝くく　縁ををよび

人寿を延ぶ

古人の刻酒の法あり　二合を飲敢孔限りをを二の法を失ふ時

をを労を孔く　才を二す　箕子一たび書く　延齢の良薬と書く

○

三反ありて人と援すの媒とおぼしき反ありて必ず残失ふ
の変を悔ひ労苦を憂ひ形骸疲れ時飲べらべ
世の文章も多く義術とも云ふ文で習ひ学ぶる者の書きたる
威あることく多くぞと僅すべのとハ形きものぞ〳〵落命の人は
書きたるゆえ出すべく威風あることえ雖きと多くの暢の吉明の才文
花書画の義好ぶ情多〳〵茅こころ ひとたびハ零落しく世のあり
さ反と性〳〵牙と顧こころ人こころれど綴りこころのごもかの雖く
めでたく書よこころるぞりあくハよろづやきて通ぜべ
幼きこれ出て接びは風騒といふこのありて和歌何人のよこと
るよりあり人聲ハ〳〵のぞる時ハぞるこだま〳〵下ぞる時ハの
ぞるべ嬉書〳〵

○

すがりある竿は手足を接こおのれ動と弾ふ猿ふ
こあり一花の意をやふ人百一生の動形をよく詠べ
竿ハ業ふ〳〵嬉ハ天地の習はありて風を牙を扶ふの気
世はあり〳〵人零落ふる人れのとに形ふ〳〵ふれ
市ふやきふ 境遇を要ふ時世はある人を境鞭を要ふ
要ふ落の人ハ境鞭を要ふんとふ
人は云猿ふ境鞭を要ふ争ふ発は零落の
は世はある人の云ふハふれのと何ふ〳〵鞭のふまきをすて
鞭のふあふぬと要ふやとふ人ふひて今日を
その事とよを都お〳〵の響志はやふふ形れば稽はふ鞭
ハのと北ぶ〳〵者ふ美味我食〳〵ぬふ人のふ〳〵食ひたふ

をのおり弱き者よりぬきを含ざまを給乃味ひみ〜ぐと
いふり
人の信ハおのれが信を以て引半〜人れ伽もおのまぐいろ〜
より引おすめれ物り伽りも遂るときハ信とあり信も遂
ざるる時ハいつもうとあり物うさまぐ靈も謀もおぐいるものの心ふ
ありて已おを知りて人ま嘘あるとあり〜おのれ嘘ありて人ま
謀を知るぐるぐ性人ら〜くむづる〜きハ心の性ひとつ好り悪
好法所ハ遂のひとつおるろ〜と書れごまおひを表ま〜づると
あまこバおるろ〜とひどを知るふ器ず〜〜捨やす〜性を心
ま知るくあるを所れきぐ為ま捨ぐ〜るまでおりをを内ま
あれぐ色外まあるいるるこらいり志ふあまで義るれまでいり

のうちふあるくまづあるふ形るをよるまこれハるをいふ中
をを靈実れ根ざ〜ふもふるの中まるぐ〜刀とおりのおまり
ぐね此焼又に刃ぐね残るけて打あげるふこぎこ〜るの切あぐ
るぐねのくよまもまるくよるきてくおあぐるおるまも飛沼の心
に多るを十本のうちふ一本あるおきう形るいり
お号義仲の信畑るるを志つ弓きころ人のむすあふちまこく
姫らんをを色ふるの女を飛琴乃山住みるく挽具の木地を挽け
るをのるる子あり女の母おるくくいるやーき君乃子おるく信まぐ
あるくまは武士の妻とあるぐきのあるくいる形く青ぐる人まぐ
をおぐつるるくぐ名れ信れぐひるぐるま拝見まるるすあるといふ
ふ嫌の人烟まこのまを〜をくバ畑石奥まて義おを乃也に不見おお

りひ女と云ものやと云ふ者り乃至ぞその母まことに孝心あ
老ぬれども終よ祝りぬる人ハ武士の家ひとしく烟屋の討
死ぬ〜ゝ面ひたる時おのゝ〜と祝里へ入り住るやうなる志あるも
武家へ嫁〜しうとゝ和〜しきあるを以り住る形りとあるに入た
夢つゝの行と成〜ゝ〜ゝ四くても書とせんとて終よめとり偽老
の契りあきらざり〜ゝ元暦の乱よ入ぬ平家滅て里人大いよいきて
北条深谷小飛入りて累ゝとぞ
あるゝ岡家の幸ゝ人武家北下部といさひ〜ゝ下部を手掛〜ゝ
いさひよ勝うゝ〜ゝ足をよて自貧するを変てこ主人大いよいきて
ゝ〜ゝ悪く云ける 亜〜よ人といさひするのゝ形ずゝ下部うと
も武家幸ゝの人ハ世を治めるふうぶ〜の召仕るゝの役びとか

里おのゝ主を商人の手代私後世はなるゝ分をもて武家乃
召仕るゝ人といさふこと不届形りうゝ家風よかゝはぎる者形まぶ
呉今いと女とうゝ者ありとゝ〜ゝ呼たれども変れず〜ゝくその宿
へ引ゝ〜ゝぬ
天の原を満るとうきゝ呉ゝざるとゝろを捕ひ地北ハ盛ゝと
ゝうを減〜ゝ衰ゝ和を扶ゝ系数ゝゝ暴拙を生ぶぬまぶる
人ゝゝく飾るぶ四名よ美麗と形るゝれバ貧ゝ者ゝ多ゝ冨めるゝ集
むるゝ家形りあつむるゝ拙を清らす形り天地ハぶゝゝることを嬉
ふぶ四名ふ万数とゝゝ肝保〜ゝ者ゝざるゝ止めずゝゝ花ぶまるゝの
ゝ年と形る清乃地震大風大雨火災人よ在りてゝ塞ゝ塞停清よ
ゝ〜て百病と生ず易よ云対策を倉よ納めゝ〜ゝまるゝ北呉

八盗人は奪ふことを数多あり化粧〳〵美彼と美〳〵ぬる女八家
と犯せといふひと〳〵行り情はずんばあるべからず
信濃の国の里に四季迄の句合あり元禄中より五月五日年
中仕懸ありおく〳〵ふ句あり何某の大納言殿〳〵めされて何の社の
やしろふりたの句ぬ〳〵と詠ぬ〳〵と行りしる時言葉集その中
に歌ものは何ひ生ず彼あるる村出社やたる白ありしと
てはぎ〳〵の使の消息をみひてを〳〵系へも出づるものあんまを
多〳〵系〳〵ぶ〳〵ふのことも出るとあるがく〳〵るの村出はぎ〳〵系
へかで〳〵詠ねまい〳〵すふ左あ〳〵ぶ金ひく〳〵おがうせんとく一角へ
通〳〵ぬ八五ず村出る風流の面白要のうへまでも安元ん所こそい
とありがたれとなまあるする形りと云ふ大納言殿より呼社とあ〳〵

ありてさく詠ねあふる年中の頭と云る頭白のおもろくれ
ぬるるふる孔句をを安さく仮まで逢中たりいるる友事
やしろ〳〵〳〵ヤセ〳〵ぶるとあり乃五八村出たくへく元やうのよ友
事とヤもいたば只五月西のきのふを行りるあも少生ぶけくあ
すも又〳〵涼〳〵ふ八一年の頭もこれ仮のきだれよりあ
しぬ〳〵きと思れいんより中る外を不存あくれ形りとヤ乃五ず
おと〳〵るるおぶ白る形りとく〳〵ふ〳〵ぬ頭村出が〳〵涼言搖
いでいるる乃事ぶと詠ねまるるれば大納言の仰よハ〳〵う
とく〳〵ハ磨がありひ〳〵とふ遠〳〵う要肩西よハ四肘のとく頭乃さまい
ろ〳〵ふりるる五来面のさび〳〵きふ〳〵ぶ頭文だちよたぶ
へ林の西社をのすごきようこち冬乃頭社宮きあるとたりこ

のとやうきおぐろうまあまばうれをしりうちかみやとやうしうる
孫伯れどる左々形くて洒の呂やうあくんらめこ仕まうこと有比
奥てハおゆひ伯りぬと仰られしく

○

とてかの山のおあうまゆ留本とうる里あり紅葉すうろうあうら
しこ豊臣しつうふ紫垢簾まうまやひめがうして系の安さうう
に出の旨あどたど形くずおりしろく笑えり是ず夕これをもいろ
ぐく寄形ど月ほたどうあんと接あくふうく移て足うた子まく
結ふ菴ありこふよしあうくんのかうれ伯まやとくく床几と乞ふあう
のさ夜つやしうう尼のたどこれ火形く拾ぬ〻円〻うて体ひぬ
へ系よておりすやあどねどろふいうをものごれ嘉ぬいあくで
あくんおえんぞうく世とのどやうまるしあふこうう昇幸のうこさも

おどえんわああど御じゆうまやと庫れをどれうう黄と接め
ぞいあとよさやうふ世とおりしろくるる身こひあんんはうつれ
うふ吏のちうざしあくくをと書ま溺れて接ま吏うう身形り
女のうきれ二人れ吏と拾こざうと点うたまずたどよとあぢき
あくんひすてく今の分くハありぬとうみ見ど伯ひすふこのち
の果家と餐してゐるまハあんど甥の城ま れ里のちる縁あうを
ゆてくふをうあり形ふしく求うままぞよりて甜ひのくうくつふふ
伯くく形くやうしきとうろあまぞ墨筆とうぬるまをうくあよこ
ぬど藥おの経冊ありあれま書てのくうくとく出しんま ばうちく
ゆ里くうふ考の飛うる結あくうど人のあつうふづきめくも人をざ
里れどもなのくき要めて書て伯ううく降りぬ

○かく濃き色もとしはの山風にちとれば人嘲すなるくち葉

○借用さぶるやぶ千金の重きも奪ぶるしとハ蔵房ての詞にして借銭の多き残苦しやむその身なとも借銭より先に死する大借なり世人銭の利とおそれて天の理をおそるなく借銭なさぬ身となすは禍なくんや理を浮る時ハそれ身も亡ふ

洗用何業ともなく酒造家ありけるが隠居して瀧津ともに子何ぶところ弱年の身をもちし半ハ親の家の気ぢかりする席子和尚ハ論まするやと又それをハ和尚などきこひなりとなり何となく宥がたきとを嬉ぶぬぶとて又世はすべく和尚子どもよく拍よく書く人などいふ身帝と持あの眼くて身不埒にしく家産を傾くるものも多かり成子さやうなることハすべしもいへさんる家業大切なつことあて金銭多くたくハふるよりハ外のこともいかしやさもんは怠なりといふ事あるに云をあるハ書状も手紙證文送状あるいハ関所手形船手形などもしく又手代人も塵俗も多く鍛生しるふやといぞ定免はひてあれハ昔よりおなり来事し法那未ハ何ひともさしく用ひざるをあしといふ事なし法ハちと何人の始めおきたるぞといへばさやうのむづかしきことハおゆぢいさんハ雑人などてもあり侍つるを彦されなく事ハ済つきなりといふ事又云からむ文の侍るをきかしと身の彦より出来るく今書を注く人なくその法ハたたなりさすれバ此身家をもつの人身を保むるも大事ありて成就す和尚の彦書は何ぞ備身斉家の害なりといふんや身の者のんになるべき事りとふへぞいへなどを学て論しうる

学問しても博学多識となるとも人情を察して世務に行はずんば
何の為なり聖人賢者の世話やきなるも言ふばかりにて用をなし難せよと
の義にはあらねど理にわきまへたがりらく人を俗物と見下す
歴々の儒者の俗物を目より見れば尚さら高慢なる者は角立て主
て無益に見ゆれり君子は時に随ひてよく俗と交はり
はるやかるがゆゑ俗子は俗物に交はれざれどもやはり俗物なり学びの
道は粋となるざまなれば質朴なれば書籍は粋となるの助けなき
ものぞ知りて表へあらはさず隠しさる時につかひ用意はこりが
なるは人ざるに用ひざるなり
人に饗応せられたる物をうましとおもひ亦まじくして人食する時
は外にまく含しさる時よりは味ひ宜しくいかにとなれば思ひ

まうながく食ふが為なり食をもとめずして食するゆゑに食
ことはありされば麁食たまさかなる時は思ひよらざる所にありす
すく食はうましとおもふを知しその時と変らず殺中に
道じく口よろこびうるよりうまき物は何にかあるべからず空腹には生塩
を添へてくる湯漬も山海の珍味よりもうまし彼の名もなり
初めに望まるるごとく望む人あまでも寄しおそず格別筆勢
墨色すぐくなるに似るとなくおのづから発せし勢ひなくるび
ならひするをとありがたし
吾江戸にあまして武甲山にまうで日本武尊の旧跡を尋ね
せんと両神山へ行けく人とともに是にともなひ秩父郡大滝村より御
嶽山に登りしものあくの麻平にて平乃(?)が熊望多

をすぐゝ古戦場とぞ尽しるべする其江戸のくぶゝてゆくこの
あたりの屋敷ゝと云り
武蔵国古戦場記ニ云武を崇め嶽に立るきゝ義して神威を
平の和ふ為めゝ文と藝民の際まやらげ徳を示乃仁政
ふ為きゝるむさゝの国の嶽の山ハ叔倉子義と遠国標有樹の
妻樹乃里まで江戸と云ふ所して行程ハ山の樹
懐ゝ妻樹村中金剛精舎古樹の樹あり四囲実を結び
熟す其ども緑のいろをうばるゝ所ふ妻樹の名ゆり来て山西ふ
と名づけてさ新ゝ絶頂ハ仏ゝ園巷と呼ぶ十町ばかり孫
保とゆれば後孫鉢ゝ我あり村落ふ流れを金ゝうひふ
たの和ゆとふ朝日ハ山ゝふ高ゝ一顧すれば多摩川の源れ

とぶゝて山ゝふ入ハ流れ乃者谷ハひぐきゝく
人のあゝそひ居るゝ如ゝ山河のすゝく業紬ゝ数里ハ乃ふ為
曲ゝ岑ハ多摩郡谷ハあゝふれさゝ仏頂寺ゝふ有ゝ
者の家乃多あり山沢耳へて八項き示家者のあとをとゞめ岸崎
くハ石ハ猶沢の名を残ゝ往古ふ戦場ハ拡要たゝる陰翳さ
る叢深と為りて煙ハ山ゝの樵夫の撫弦をゝ所ゝ竹蔓
翠ハ礫を埋め月さびゝ古ゝ尾花白双のひゝをすゝへ接
接風ハひゝるゝて松ハ白雪と霜ゝ翠拠枝をゝれて丘ハ
結ハ糸をゝち初縋ゝゝ乃ふ田園ハゝゝけ金刀むゝしゝ壊の
中ハゝゝ花多ハ附を威ずれば奇舞乃業華もものあゝり
あゝ月ハゝゝと為のゝゝきハ移補ハゝこれる盛衰も紅

○

蘂の色はうろうよりはうろう殺気おく昇平の日景おゆく戦
場より帰り雲をゆく人数彩をあらべて路より窓のあぎをひと
つゝねかくくゝごゝより踏分〳〵救多の屋も御ごとりの事とゝふ形
る迹ゆも修成々の比無いとハかりぬ

○

藥の蓋を食ひく老宰の浸味をしゝず破ゆうる温抱を若
く厳冬のさげ者をうたり紂宮を多く老ゝゝ化の人より
譲る老を今の番人おさハ有紂錬鬼おどゝるゝるものあれごゝ
人欲の私おく形ひゝゝの人と謂人も石可あゝずや
俗の燈籠菴ハるのむゝ小松門府の燈籠を造られ〳〵和あれば
るの名残丑ゝうゝ六波羅より東南おあゝて小立きこゝろれ
ゆあゝ附あをつくゝてゝるれおたりを惜ゝるゝ弁の如きを乃

多く歩ゝり表ゞねゆゝてゝるの形丸く左右より図く会せゝる西のが
きゝの俗ゝり長さ一尺あゆり巾ゝり手ゝ衣文孫ゆゝたゝを尺ゝり
古雅いたんゝゝゝゝく敷もゝ紂若の質素ゝるとおりひ者
ゞ今や表羽表瑜乃弁あゝひも仏ゞおゝ造まるものハ
母波俗ゝるの変ゆゝゝくもさゝず手ゝ紂父れ物ゞゝゝ大
系ゆゝく男も弁をさゝたり巾をきこゝろまさ尺若〳〵と人仏
ゆて結ゝつゝゝ結ゝる蛇へ接ゝさゝゝゝるゝゝゝおく塔とも婚ぞ
たり表ゝ変拍の如く筋ありて重ねゝるこのと尺ゝ門ハゞ
皇宰ゝゞめゝゝ好事乃若求めゝ手ゆ辞ゝこゝゝゝゝの罵ひ
ゆゝめたる人多くも痛をゝ病ゝる表ゝ浮ゝハおゝゝゝ接てあし
ゆり浮まゝ人ゆゝるものの接ひあつめゝ再びゆゝの塔ゝ重ねて

○

ちゑ院より遣しがいと古代のものなれあり巻人の墓あるしあやとあるる
高師多業坂のたりよひくき平地あり叢淳と外りて跡かし多
辺山より下まよ金ハ救歩ふ〳〵親書を火葬したるとのこ
ろあり香辺邪とふより古老のおがうあり一基は古碑を存
ち弘長二年十一月廿八日と名りてあるみ何うに新蘇生ひ
名り人跡ここたうむ〳〵も一向宗乃つ焼き骨をこのところ
指来りく堀こうとや
誰人の墓こいふと名〳〵ぬ古墓三乃ヨ山つへうあり鼻血の出
るときこれ社塚残いのうまうあるす殺あり何の祟あくもさうげて
鼻より血は右よりいぶまず左の陰嚢を撫り左より出れ右をふ
きりておすまず多ま煮るとこ

○

紹智ろうく士明とふ香炉を拾くく火いけとあして明干法師の
対来られしとうよ歩やり明干師接つさすりつ香炉をあれ
たりある附又ありてその香炉を法多くと又くやこ法ハ乃ふ
くぐあり社名器を何ここく火いけよハ右多るやといハ紹智笑
てやされるふ社器火いけいこくきひ使れぞこそ老僧が目ふ
つそをまれ物多乃り香炉あして床おおきこハ左ぞよ名
ひぬたぐわのとと云〳〵とぞふの羽人のこふも面ひくいとあり
ろ〳〵

○

高京の雑波や与左ろと云る接女屋ま演義といふ左夫あるも
こハ播州上る物の高京おもしいあるめく姫ふく人の家ふ嫁しけ
るぐろの家衰波ま及びて夫ま接れ親のもくまろうれぐも

親の都もおとろへ父母を養ふんが為よりなりが才ゐ
分とうて接女とハあり〜形りの良なるハ江戸の廓へ移
ま〜る時よりあうてよき接女とうれ行んと十二人の接女を
こゝ〜中みとる演萩ハその志〜尋常あらず風雅の長まも
うとゝ〜ざれバ見けるあれこゝとうけ江戸へ下るのぞて演萩
ハ与左ゑもよりゞ父母をゝとる江戸へくゝりたきよりれ親をゆ
〜ゝ弁されざり是ハ客よりゝ〜ひ事のよ〜と歌きるよ雪の
客豪富のおき人ゆく彼ゞ孝心我感ゞとやすき望ゝ〜ふと
て路資とのゝ〜ゝあるゞ与左ゑよ教をゝるゐ費といとゝぞゝ
れが親ひも安ざゝ〜ありこゝ〜ゝもあげよ引れバ演萩ハふ
ゝあやとる使ひつゝ下り是演萩勇ゆの中をとゝうゐれバ化の

接女もこれよりゝ〜ひくゝその家繁栄〜一人を二救多の益を切
た玉ゞ言祈こゝゝる茶店をゝひ演萩ゞ親達よ法ゝ〜ゝ
ゝの演萩ゝ〜ゝあゝよくゝ身をつゝ〜ゝ明れよ父母をゝゝ忍て
動ゆゞゝも見ゝ親のかとゝ行ゝよひゝゝ是ゞ廓の中ゝく
も推ゝ当ゝ業ゞゞるゆれゝんやゝの法演萩ゞ教句よ
ゝき人よゆのゝゞゝきゝ火瘁ゝ那
好ゝある貴人よ招曳ゞれて出雲のゆよゝう親子三人おくめ
てゝき養〜ゝ形ゝるゆ孝の恵ゝゝゞ〜ゝのゝゝ形俊雅波
とゝゝれ名を使ゝう
幕浦浮波清濁逆声ゝく山川海谷の深浅言葉よりて
ゝの用の多ゆり是三方言ゝ〜多変ずるゝあゝゝゆ逆音の

移声をすべて正す時ハ用〻次と関東ハひとのこゝひきれど
を五畿内ハくさひイと変り枸杞茂関東ハてハこと
ごとを畿内ハくこゥとゝすべく紅粉とハくだろうゐべきを屋
といふことを蒙らしめて稼ぐを用ゐ係ありたまハ羽ハ祇園ふ
りのよハあゝず音便の序ハてハ此ハ自然ハ出べき羽あり
ゐ者そとこハ通ハ亜者の羽ハいづれもあの招牌といふを考べし
亜者も祇ハよハあゝず祇ハ四あゝの内ハ清音濁者とゝゞもハ
然ハ出るれゝ上すそ下濁ハ自然の通称ハ此ハ洗濯ハ
ゐ幾ハ下をゐゞろて唱ハまでも関東ハ下すそ以ゝこれハ
土ハ月然あれバ下濁用の字ハ濁るゝ言ゐゞゝ裁ハ
大抵くさねつるゝ又字ハさねやらでさねずるとよき本房ごんぐう

○

兼咲翁の滑稽ハ人の知るところあり一日予がもとに来り
対面ありて世人多く茅蕃を求りて月毎のわがゝう絶ざる中
ハ出ハ法院ハ天狗ハ知るゝ僧侶ハ崩れ〻〻菅家愛
ゐ形りて筑紫ハ晒せられしゝのふを書くとをのゞろうする人ハ
多くれども実説を詳ハらさまるあの一人もあゝとゝ数鬼ろ
ある侯十万石を給ゝあゞ困窮せられしころ大坂ハて豪家の
町人ゐの侯ハ対面ありひすすべく倹約を以くまるをするとく
家来の孫をゝゝ諸事の入用を減して上向きよりそゞの条
合ゝゝ下ゝゐあれハあゝひ形石拙者のつき会ひとも者ごろ
くれゞ家中いよゝひゞく下ハ多ゝやし多ゝあり紅収熟盗賊
いよゝ増ゝゝ窮乏ゝゝ何ハ家ゐの仕法を変ひ

て予に之をと欲きなるに予にこゝにて云ふ本末あり事終始
あり終にすべきをと始にして後にいたづきを先にする時ハ本傍
まなしきハさらんなしなく善なのなる家臣の經濟にたよる私
欲のうすくしく謀君なる君をたすけて元を流人なをあハせて
徹の法を行ハるれど困窮しゆふとも年を追ふてく窮さんを改
めいふべきにあらず緒をせらく利を得んとする者民と利をあら
そふなり國家を治るをもよしつより云猪ふかとく奇字の
謎のことばへあつまらしこの文字をよくゝときハ上に立んとすれバ
下可ならず下可ならんとすまバ上立ず家を治るの法まづ撫
じたるところを修覆して後おひしかさむるを起すべし十万
石の領中一万石をなきものとしてく以へ九万石を以て家法を

たつることあらバ一年に一万石十年に十万石を余せり左候らバ
日々を溶めずとも大名の家計何ぞ町人の財を借ることを用ん
やといふべき策を聞りて帰りぬ

○

予がわとに言金につのり購ふる書合ありある方へ賣る時人の云
るハ左なりの名器人も知るところ形をも持てへ来へてよくいた
く止めなれども賣りさりやむをと得ざれバ爰り念ふに武家に
て武具などらバ恥辱なれども衣服をもじめ茶器などハ賣拂さ
るともいさゝか家瑾といふべからず井戸熊川の名物金岩元信が
名画なりとも民の飢渇を救ふの便なし或る諸侯領内飢饉
のときに重宝の名器をもて窮民をすくひしことありいとありが
たき仁政といふべし

牡丹花肖柏西山ヨ居られし時百金を賊ヨ奪されノ翌ヨ山
科の草庵まく菜器をそうたる残七年翌を盗人ヨこれり去
られそう盗賊を食糧と衣被とをさらヨ奪ふをの形れバ在俗
の人ハ拾ふ〳〵世を捨たるをび人ハ華美の衣類と金銭を
ハ儲ふべからず家の調度もあるべきもどハ土器と紙だりのこと
ひよて渋すづきとあり古れ紙を付ぐ者一枚用をあるべ〳〵
弥陀如来観世音菩薩勢至菩薩の三尊ハ拝ふ〳〵拝ふ信
ずべきを弥陀をいふまぐもおく観音こそも何ぞまをあつく信
んきれ仏菩ど勢至だろハきれどふ尊敬するこもがらも形く又
勢ふをあ亟する大仏盗ちふ〳〵労至ハ切ハもらぬき菩薩
ふや経をだろこいふ人も希ふりとおやれそうれを人はた

ふくこんよハ美婦人乃おくおそかきとひと〳〵ろ〳〵又京生縁の
うすきろ月庵〳〵ふ仏ヨ出入ろる仕合セ不仕合セあり いそんや
今日の凡夫ヨ拾ふくをや

一休禅師紫野ふおそ〳〵ろ人ハ書をのとむるをのあるをず
御用ハと書てあるを人ぬ志ぬ〳〵他のをとをとむる若ハれバ御用
ん〳〵といくつも書なひ又上ヨ只ふ一字をを〳〵只乃用ハとろ
セをのをもあるをやいをおり〳〵ろ〳〵ろ弦すづての事ふよ
ひく義刑とも形りヨ乃を予上もまさろれヨあるひく用ハ乃
二字を合セく一字ふ似り書りろれ文ヨ云
者度只をず忍ぶヨ彩〳〵兼多ふ乃れバ思ヨひと〳〵ろるふよ
乃れバ思ふヨ似ろ

○

龍宮の歓喜といふ儒者を尋ねて薬恩入寺為吉実択恩
徐といふ文芸を何と形くらよひてをりと云り
伏見より年十年業ざりある老翁土保人屋器のたがひを
荷ひて洛中を售りあるくいつ者ありあきあふ物ありく
合ゆとする形ありその物は乳薬入大勢あつまりて翁ゆ云
久しく乃牙の荷ひてるものハそれ便いるどだりの形ゆやと問
ずば翁こたへく銀十五匁ゆどの荷あるゆとと云又問京の町
ゆ人の行ひ繋きこと有あくこと〜あやまちくこゆ砕くゆ
きの扨ゆもあるゆ必ずやうの時ゆハいづするやと云ずそれ義る
ちゆ玉ばさるとと形〜ハいふべうさある時ハそのをあり乃
ゆ述べく象ゆも年久〜商ふれば考荷ぐるゆハ情ゆく

情ゆく商ひやゆりといふ又問ふるのゆ人ゆも又砕くゆどきゆふ
をゆずその時ゆまさいづするやとゆどやいつゆ問答ゆ
玉として救ゆ扨年ゆもいひぐさ乃玉ゆるそれ形こゆ生涯迷のごく
来ゆふりとも救すゆり外ゆせんゆ形〜と云り
龍神ハゆを洗ふゆ妙ゆる術を乃く一滴乃雫をりく墨西殊
降〜波濤をも起すゆふ又人ゆ火とつふゆ妙ゆる術をゆて
一粒の影を加へく以て業ゆを焼す天地の際ふゆるゆの八木火
土金水の五つより外ゆ〜一五より万ゆを生化〜く業類形
容をとゆすゆふ龍神の乃術五彩扨中ゆのくつふゆ妙ゆり
て他のゆ人術形〜洗ゆそぎれゆるとつをゆ〜人ゆ名彩をそれ
くとゆ多ゆ〜ゆ量を以く色不及多〜世人火のくを洗

ふる妙術あり〻〻金をつくふる妙なる業を見て多くハあり
金のためにと労し身をにす若少ゝ〻さあれ共火木土水
二元四つのあゝ妙をなして金を造ふる拙しとおゞの人〻〻
金をつくふと火を造ゝ〻ゞと自在をなるものあハ生涯ゑろ
てあるべからず
接乗者費ふるとあり費をたゞけハ〻〻乳〻勵くも金
益あるものふあ金益をいくふ肘ハおゞさくふ〻ありろきハ花
きこゝろよあり何やうきを破れバたゞ〻ろきとふ〻半生ハ労
と食ゝ何ゝ労せゞ〻〻食ゝるを不及ふ益ゞ命て然を終るこ
ゝをゞ〻調家と人身とおれゞ多〻つゝゞ換ゞつゝさるもあく
換ゞゝさ〻ハ業生をゝふ及ふきをゝるゞ〻病を不業生をあ

ゝて世ふ気を為託するこの事ふ病ふきふあゞ
何ものゝゝどの大酒ふく痛飲ゝゝども一睡〻〻精神とゞふ静
むる肘ハ和〻て身を換するよいゝゝず酔〻ゝ芸ゞ為ふ犯され人を
強ゝ乳あゝさハ女色ふおゞるゝゞ為ふ精神虚耗して仙術殘
破を癈渇胃中ふ痼疾とあり〻〻血液を腐敗す甲〻腎を
やゞゝふ及ゞ

餅ハ食味するこの外ゝ多〻食ゝゞ〻ず餅ふ食傷〻たゝふ
赦ふゞき術あ〻〻只ハ病と〻〻〻禍を出すれ扉あり〻乳バ一言
〻〻智ゝ〻一言〻〻不智ふす人人の表形人人ふおりハゞゝて
ハいゝゞと〻ゞゝこゝゞろふ必ゝゞゝることをいふゝ人人と表表す
何ふよゝゞあり乃ふきハゝ久人のゝとあり多〻あをゝ〻人指ゝ

稲を拾き家を労するの婦形りされバ財宝多くこれちく生活
ゝ〜多くゝます八只財宝の多くんとを好む者あり衣食お落
ちく財を持若只多くつあるを生活のたの〜ことく終よ財
宝のあふ身命を亡ふ方あり欲ずき人は日より足る時八夜の寒
の火をこれふおのむくまを形くず
浜華の半稲ま持び〜ころ農家まて稲麦おろ穂を拾ふすも
は子床九は如くしく割こる舟を接ま人ゝ立てさるといふ具
ゆうむゝよりゆうゆうるおよやある古家ま
苅て乾き田の稲のハ束穂ふされこうゆうゝ秋ハ束ま
こあるさるといふ詞の解しゆぎり〜ゝ出稲ま形ゝ知り
宇治本情浄仏田あゝハ背接女多くあゝるころ形り古き

浜辺乃地図ま小孫姫町とのふところありゝ遊女町ありゝのう
ゝ多く水辺ま居たるを古書ま見ゝあさ書ま舟は図あども
おりひあたゞ〜
地図ま出ま海生家の豪家ゝ手ま労あまく宵ま湯ゆこ
しく酒肴極月は廿日あ人ゝかの客を待ハんとやゝ〜ふおゝゝ廿
九日のとふく家計ま混雑は肴ゝ足るよりいう
ある変ま多ひげ形き拵ゝ座〜きま積ゝ結ゝ
のおゝ〜手を見〜ゝこゝもいひ出ゝその教たやく要ま〜
をよひのおどより酒食は〜ありてゝ貴ハゞ才ふ〜ゝ
ぬひくめでたくこゝ家ふくゝ年をむゝ〜ゝく教の明ぬるま
でものゝ結りぬさぞ茅卧ぬゝ〜ひとやすゝ〜ぬとて卧

しぬるころまで家内より家事の用をあるじがもとへ云来るとて
ひごろもありきよされと感じて吾半が風流のこころざしを
ほめあひぬ
伊勢より伊賀へ越る路にて夜がしらじらとあくるより一人の男のぼりて
きりていふやうちまたは大坂の者なりしが道にて餓鬼に憑り
ましものや飢てひと足も歩まず中々に大いに難渋におよべり何なり
とも食類の御持合せあらば少しなりとも恵み給へといひけれは余所
ほぬをそのものなりとは思へど持中なる食類のこれも与へ
ず刻み昆布のありしをこれなりともよろしきにやと与へける
に大いによろこびて直に食しけるが同じく餓鬼のつくとあまた
ありけるもののなくあるがごとくなりて云々と云月にあらねど此なくなり

に限らずこころざしまで空腹にて餓死したる残念そのこころ
に残り侍るにやそれ念餓鬼となりて通行の者につき附侍る
なりこれ手につける時は頓中たちまち手足飢えて気力なく歩
行も出来がたきとこれゆゑ那のものより此の薬種を商ひ
勝手に証文をとりて侍らねば施しのくせしとぞ世にはさやう
のこともあることにや此日播州の三文字なる侍ることの
僧中なるにこれ若輩のもの伊豫まで餓鬼に付かれまゐらすること
ありよしさて諸国行脚せしをりは食事の時に飯を少しづつ
とりおきこれを紙などにつつみて袂に入れ置き餓鬼につかれたる時
きすためなりといへりなるがごときをきぞありける
古部とは医者出れ招要にして人の行ひにていささか油断せざるなん

よろづのうもこづゝ出るに和より〳〵よろぬをハ出て来る
ゆう〳〵空き射を風邪まとをされぬものあり空きの日
るゝこゝる射ハ邪気ハ感冒するあく初ゞ〳〵こゝまさいある
ゝ出るに射ハそや大悪のきざゝとゝやふゞ〳〵邪も気のゆ
るむときゝるあり されハ小事と出るざるゞ大事の始とゝろく品
ゞ〳〵吉なり

かぞうのゝ世のあゝひぞと出るに死累ぞ〳〵

ある人吉田織アより伝へゝるゝねつゝぶと云る香合ハ初ゝぶ
ゝもあき器物の中よりゝ出ゝ〳〵ゝ奥高人を呼ゝこの新出指
ハ五指ゞあり足ゝ〳〵罪九ゞ〳〵て足出るゝ多くの高
人打足つゝあるゝ孔目利 するゝ大坂盛動吉とて月のきゝる

この此香合と足〳〵ゝ出るゝこの形ハ〳〵きものゝ初りのひゝ
ゝゝ案未ハしゆゆゝきゝ初りぬゝざるゝやゝ五ゝ織アのゝ
ねつゝぶゝハ香合形ゝ形ゝこれ出ゝ罪ゝゝゝの地乃
形ゝハの人ゝゝかゝゝしぬゝゝ地地形ハさゝゝハゝゝ
きゝこれゝをゝいよく夢拂ひゝゝゝゝ一庶のおんこゝゝ
ゝゝゝハいよ〳〵ゝ拂ハあゝゝいゞゞあゝゝ五ゝゝゝ
ゞゝ罪ゝて古あへ指形子両ハ童ゝ出るゝゞ地無おき

あき人いと殊様ハおゝゝ

人世の浮沈ハ者ハ〳〵盛あゝゝ出ゝ衰ゝゝ
きゝふるゝ者のゝゝゝあゝゞゞゝ
ゞざるゝ孔ゝ形ゝとすゝゝ浮む漑をあれと空色上人ゝ

みつるハうへなるべし大江何某といふ人九万両の金子をもてる身上なり
ならしく性命を惜まず御こゝろざし魚をあまたかひあつめて
知る人の方をめぐりて今よりこれ魚なき人とありしまゝ日ごとに
まゐりゆへぞひとへに引込のひとをもまれうしてこゝまで美段
なく安りさる筆の家へ清くかの姿なくたのしく行ければ人ごそ
の志しをあらはれて感じく魚屋世日ましなさんかて天漢なる
何某にて今現主その家を続しくり常主の大江某のひけ
るを金銭もきてれくまりなくきれいにつるべしこ世にいへども
家にうてあらずすきれいにまうけて又きまいふ清りふなり然るを
拙子あるべし他の器子つくるも今取するにんあるくに集扇にお
まくいさもなくおかも申せど他のこゝろにゆまずいとくむさくき

ただし人の身代上をこれと同じとおもひこの故に君子ハそのこ
ころを失はざるにありといふ孫子の符合せり
ある人の書乃ち忠信勇を本として政を司る輔しを不用
の役は多きを省かる時足軽の組る二十人ありけるを六十家と
しくして足るべしと評議一変しける時至君乃仰のやうハ六十
人の君子ハ脈をつぐもなやとありねらるゝに仰のごとく取りとあらふ
そのかはりども八百身なるつまさ夜親妻子にあるものもゆるにや
と仰せくれしにあてくや汝やう何事も親も妻子もあるものは
くれとや召されかきあるバ勝をつらりし取バ大勢のかはりにもこゝろ
得まよふべしかきハおもまに知るべし底ハすくなきにぞかし
今大身の内にハ万石ちかくえるものもあるべしそまを二三人

腑なからしむる事のあるを三万石なからの有余あるべしと命
出されしにより其の儀ハやうやう止て良君ハ仁心もふかく
ありける事と人々申あへぬ
河内の葉先といふところに一年ほど居る時常に麦飯のみ
食ひ給ひしが公ふかくかんじ給ひ時おもひ給ふ八日薬ハ
麦飯を食ごして法を篤卿郷地にすゝめ親常ハ幾の四分に
ありて師家の恩をおもふ弘通の僧ハ身を搦下石上におきて麁
食をもいとはず弟ハ志ぶしの義ぞもやぶれて麁食に堪ずしく陥
らんことをおそふのこころざしいと拙く人御乃ゆるさざることなり
こづかう悔ひたり
紀伊の国に名産三品あり 八代焼 八代塞 柑合瓢あり この中

合瓢乃拵しかたハ時も何籾なく附ても清らん飯へ薯蕷を
加へてよくねまぜ揃る時ハなまるを形しとるなり
蘇鉄の葉の拵るを黒焼にして胡麻の油に和したく以て塗べ
し金瘡切り疵手足いかなるものを以ても洗あく洗ても不愈事なし
妙なり 楠正成が家の法形りとて左衛大枯屋のあずかる事に伝
へり弟が友中振弥次郎といふ人の耳根にあたって切られし時なく
さわぎなかりし疵口へこの薬をつけて忽ち全快せり
撫女町をくらことはふまで文字に云八と書なり 所謂孝悌忠信礼
義廉恥の八をとなふより此名なりとこたへありされども撫女町さ
までなく中ずハ孝悌のつとめよろしく年ごとに八主人によく仕
へ忠を尽して家の家を起させ信をいつくしみある家にてさ

らひてやうの人を抱うず怨を推〳〵行儀をこぐさぐる
時をみきるあくざ五ずく何ぞ上ハといさんや実ハ煙の奥よりう
かる女と云ぐる人情ハ久もるべきものハこやふ扶衣のまねぎを
いすめつるくあれ設ある事あるかぐち孝婦忠信あ〳〵とまい
ふ屋うぐず

○

駅うちの風俗ハさう〳〵みもいたぐ衣被調ゑ五ぐ〳〵るあぐ〳〵時〳〵
乃流りるあぐ〳〵のうちふ〳〵いさうのいぐひハあれど又をの
ゑるよくありされバ先つる出やすくあるとも戻りやすき中ゐど
ふ居ぐ〳〵烟草とふものむ〳〵南蛮より種を伝へく系朝ふ
流行すると俗一ひび強〳〵あう〳〵をやくび流り〳〵て都鄙と
もに敬ふと知り火れるちあるをりく停止とあるたれどを

○

人情の好こやめぐ〳〵てやうくきくんも呂やるとこくふりぬ
うれ仮のことあやありくん浪よ落書あり
止たきハ公家のあ〳〵類ぞ力法師のたがふ元伯乃医者
弟ぐいとけあき附までも忍び接灯とつふこを孔あり〳〵考人の私
利ふ者のびて抑行ぐどもら接所よ聖りる級を
ゑる〳〵〳〵るせ〳〵ぐるの事流布〳〵〳〵誰ぬ〳〵うり級をつけざ
る者ぐ〳〵これハ人〳〵人よるの人と考五ぐ〳〵き為の用之あり
ぐ〳〵されバ公々武家よ限るぐ〳〵旅よ級を染め幕よ級をつくる
八波栗と知〳〵するこあ有り農人町家まぐくも今ハ級ありく宮
級のあるそひなまでをもとより農夫商賣ぐどもる級ハふきれ
ぐあり服織といふものハ乃被ぐ〳〵礼被よあ〳〵ぐこれよ級をつくる

ことにいよ〳〵いたれる形〳〵と世ひぬ世の中はたらき行ありさまをまくハこゝかろくの如〳〵

○都舎人は住める者を美彼を美〳〵美味を食〳〵て尾普の家よ起居〳〵所四舎人は麁彼麁食を常とし〳〵むさくろ〳〵きみは住むも生産人の果報乃多をかたる雲尻のおもて第れども米を作る農夫米を食ひて絹を織る婦人絹を美〳〵耕牛箱食あり〳〵倉蔵余粮あり第り分ハ已ホ立ることいとゞこゝろ多衣食はとあるまおのづからいそぐ〳〵

○風情はこゝかさよりむくへるあらねむふより乃ずるさゝばむふよ〳〵〳〵多方はあ〳〵とおのへぞ乃れよりてあるむふよあ〳〵あがめやる雪の山後は朝ぐゝけ何とゐるとぬる一家乃ぬ〳〵

○月見はいづれバ見ま隨ふて来るかげ法師あり故ハ見ぶ新ある

○乳人のうげあるゝと同へぞ返し〳〵る奇こく

新ぶげと見れぞとぞふ世の人ふをのいふにもあるあ新法師

○ある人年ごろふ来りて絵ま魂をいゝと中をハいろやう形るを

とゝて歯き結れバ魂を入りとそと同ふ年ニゝ〳〵ゝ言すづく

絵ハ人きゝ〳〵何ど人をも実人をこあてさへ我さバたゞ〳〵ゐの入

らずとゝふ和あるゞ〳〵他のとハいざゝゝず絵ま魂の入るこお

りふを法ふよて持ゝ名歯も多ゝる中ま新見〳〵新右用ま一

ゝゞ玉ゝと三持ゝ名ありこの中を子れ利休も名ゞゝく居ゝ也〳〵附

和好きをおく〳〵て庭園座〳〵き五百ゞどをのり一間ま八持の持一

本と名ゞゝり一間ま八臥〳〵る鶴二十五羽ゞゝりを名ゞきてゐり

いづれも彩色ありて古法眼元信の筆といひ伝へさうそのかたこの
絵をうける画師このちよ家居するとこ三年むろの中よ何ひと
つ面さうとなく碁とこのこうくしるれのこ日毎乃歩こうこう
あるふこうこうは遊びあるくまたやくここを経うこうこびたよ筆
をとりこともかきハこうもんゐるざる若ふかとおひくあるとき
住持のやされるハその評面をもうく一家をかやりといひかくこう
筆とえりこうとともかくく囲碁よのこ年月をるこさるこハこうかや
家衣食の費をいこうふよハあこうねど何変へかりこうもあそびなへ君
光も和角ありて京へのそノとこよりてハ一年も在ふせんもいこう
かこくこいふよ彼面師きこてそれこそいと名弟をこくこことあれへさ
あこうバ年末の恩謝よ何こうかしこくの面をのこうまあるこうすづこくこて

んうがまへのこくふくく又四五日ごとやうよ住持ゝ何と名ぐこと見こうこて
絶ごも絶て筆とこくこくあこうこ秋ふ切をの住持ゝ居乃よ秋ふけこく
来ノひこうこうよやこうこくこふ彩ぬひこくこと現きて面師のあこうさ
まと見ふへとこくやきこうこうよやゝこくこふ切をまいぐこふれて面師ゝ居
乃をこうゝこふよ明ノ侍子の掃扱よ刃をよせてさゝ仕者をこうて
麻起するあこうさあを見こうこうこふ切をと引よせこよこくこくのこくゝこくこ
ずこうやくく国せこうこくこくこの刃も病乃ふこうあ全ゝ面師まゝ
きこよ起きこゝ一日あこう侍子よ名ゝくと見ればこうか国こうこる鶏あノ
面勢乃れふこくく丹毒乃妙いこうゝこくこくずさあこうよ又の秋ハいこう
あこうこくこふよ前のゝこくく秋もすゝこくこ病ずこくこくあけるゝこくや面ん
こうやせんこくやあこくあこくあゝ扱ノ住ぶやきこくこて国こくぬれバ住

枝も葉も新たにて見しに十日あまりみまくるの鶴おのそ廿四五
羽とゐなりまさを折りけて取きはなすこゝびを付とそり見を
のべをとなりあそつる鶴のやまるさまとなく臥なるを折あけてう
の毒所ゐもこゝ仮指まりあるこゝ見ゐなきをつる鶴の姿ハやうを
やるやうやうとよべ取きはたる姿のさまをこゝはけまべ所おどろ
き孫所ましまをゐなんとまひうあてゝ人をちやくも悔りやふハ
いるを知りやてるを見ゐと所取そのあとれやうすとそ
とうゐひく知りこうとゐなぜ毒所ゐれよりこゝ二枝ハ名ゐ流ゝ
て移戸の毒を指木一枝をゐなきくいでこゐるとそこの指木を名
ゐきゝ浮来ゐへ下向の移ゐゐ来あ乃筑根の山中まて指の木れ
枝乃人をゐひゐゐなんばあゐまつをゐずゝゝゐこび

糸ゐ一ゐ中へ立城ゝゐ仮指見て大ゐおどろき来ゐへ初めて
安ゝふ又りや来ゝれゝふいるあるとみるといふをさきふ名ゐきゝ指
の木れ枝ひと枝見ゐゐこゐあり筑根みゐゐの毒をほゐれゐと
ゐゝゐをどりたまて一枝をゐきゐへいゐゐこひゝゐいゐきゐゐ
こゐゐ毒を魂ひゐといゐまゐゐゐゐこひとをりひぬとゐゐこゐある
人も感ゝゐゐゐゐ

藤田氏藏